

大学間連携による IRの可能性と課題

評価IRシンポジウム

於 神戸大学

2013年8月22日

山田礼子

(同志社大学 社会学部
・学習支援・教育開発センター)

高等教育政策の動向と新たな方向性

- 2012年中教審答申より→高等教育が質的転換が求められる
- 2013年 中教審の議論
 - 認証評価の大きな転換
 - 第2サイクルの認証評価における書く評価機関の取り組み
 - ・自己点検・評価を通じて、人材養成目的や知識・技能体系等を明確にして、それが機能していることを確認すること
 - ・第2サイクルの認証評価では、各認証評価機関は、学修の成果や大学の自主的・自立的な質保証を重視した評価に発展させている。

重要な転換点

学習成果の評価の重視 内部質保証システムの評価

日本の高等教育の質的転換の 必要性の背景は？

- 授業や授業外での一日の学修時間は8時間
- しかし、日本の学生の一日本あたり平均学修時間は4.6時間
- アメリカの大学生と比較すると低い
- 特に、理学、保健、芸術分野と比較した場合、社会科学分野等の学生の平均学修時間が低い

質を伴った学修時間の実質的な 増加・確保を始点とした好循環

- 学修時間の増加は準備と深い学びとの深い関係
- 全学的な教育マネジメントの改善
- 教育課程の体系化
- 組織的な教育の実施
- シラバスの充実



教育マネジメントをいかに機能させ、教育の質保証
あるいは教学ガバナンスの強化を実現するか

教育の質保証のために何をすべきか : 教学IRの進展に不可欠な人材育成

- 大学IR (Institutional Research)とは、大学運営や教育改革の効果を検証するために大学内のさまざまな情報を収集して数値化・可視化し、評価指標として管理し、その分析結果を教育・研究、学生支援、大学経営等に活用する活動
- 教学IRとは、そうしたIR活動を教育面に焦点化し、教育の質保証をしていくための支援ツール
- 教学IRに必要なデータ作成、また活用できる人材が不足



- 大学IRコンソーシアムでは、IR人材の育成をひとつの柱にしている

大学IRコンソーシアムの発足の過程

- ・「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公立4大学IRネットワーク」による4大学の連携が基盤



- 国公立8大学IRネットワーク:「教学評価体制(IRネットワーク)による学士課程教育の質保証」(平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業)へ発展
- 2012年9月からIRコンソーシアムが発足
2013年8月現在15校が加盟

国公立4大学IRネットワークの 活動と特徴

- 設立主体も立地も規模等も異なる大学間の垣根を越えて共通の学生調査を実施
- 学生の学習行動、学習成果、教育の効果等に関する基礎データを蓄積し、分析
- 各大学内に散在している学生の教務データや入学関連データ、各大学の基本情報を収集・管理し情報を一元化するシステムの開発
- 個別の大学での教育効果の測定および連携大学間での「相互評価」を可能

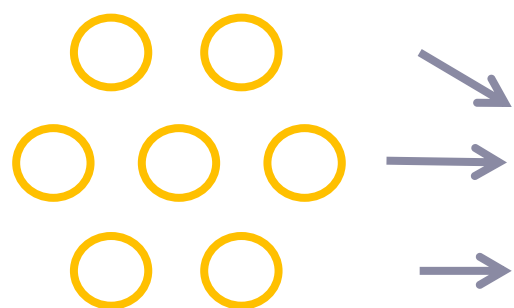
自律的・自立性にもとづく質保証・教学ガバナンスシステムの構築

国公立8大学IRネットワークの活動

- 教学評価体制の充実
- アウトカム評価の確立
(目標の設定、カリキュラムへの展開、成果チェック)
- グローバル化への対応(英語力の評価体制)
- 大学教育の職業的レリバンスの検証(卒業生調査)

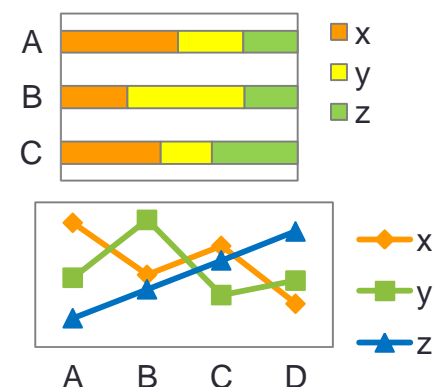
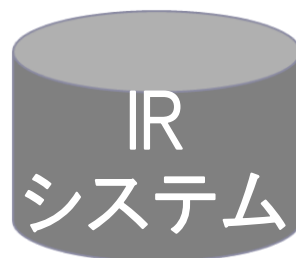
ウェブ上で操作するIRシステム

- ▶ 学生調査の集計を自動化するデータベースシステム
- ▶ 学生調査と教務情報、大学情報を内部で連結・分析
- ▶ 簡単操作で、自校の現状を数値化・可視化



会員校

学生調査の実施
データ収集・登録



集計結果

現状の数値化・可視化
相互比較

連携関係

8大学IR ネットワーク

- ・ 教学評価体制の充実
- ・ アウトカム評価の確立
- ・ 英語力の評価体制
- ・ 大学教育の職業的レリバンスの検証



大学IRコンソーシアム

- ・ 教学評価体制の基幹をなすIRネットワークシステムの運営
- ・ 情報の一元管理、個別の大学での教育効果の測定
- ・ 学生調査による連携大学間での「相互評価」の機能や機会の提供

大学間連携による教学IRの意味は？

- * 日本の大学の教学マネジメント・ガバナンスの問題は？
- * 教育のガバナンスの不在
- * 大学を動かすための外部からの仕掛け（支援や評価）の構築
- * 大学によるガバナンスの多様性



大学の個別性を考慮しつつ標準性を活用
することで大学間連携教学IRの仕組みの構築

キーワードは

大学による自律的、自律性の高い取り組みと連携体制

大学による自律的、自立性の 高い取り組みと連携体制の意義は？

- エビデンスベースに基づく現状評価文化の浸透が不可欠
— 大学では難しい障壁を大学間で可視化された情報を共有し相互評価をすることで問題を認識、協力しながら、教育の改善へと結びつける

特徴： 相互性、自律性、自立性、大学間の信頼関係

中間支援組織としての機能及び役割

設置形態を越えての協働体制→世界で初めての活動

大学IRコンソーシアムの新たな展開

- データが集積、それらをもとに議論ができる題材がそろそろ
学生調査部会 → 課題の抽出 大学固有の問題 共通性
- 8大学プロジェクトとの連携
英語教育部会
学生調査結果の集積と分析から得られる知見を
大学教育への還元へとつなげるステップ
- 大学が増加することで、教育改善事例の把握と蓄積
それらをつめてGPの事例集積 → ゆるやかな教学改善
コミュニティの形成

大学IRコンソーシアムの課題

- 大学固有の組織文化や組織形態
- 会計、監査基準の差異
- 意思決定の方法の差異
- 法人格を持たない任意団体としての限界
- 財産をどう共有するか
- 中間支援組織を支援するための法的基盤
あるいは支援制度の不在

- ご静聴ありがとうございました
- 質問は ryamada@mail.doshisha.ac.jp

までお願いいたします